

毒性・影響(1) (3-B-9-1~3-B-10-2)

本セッションでは、生態毒性試験の応用について幅広い検討結果が報告された。9-1では、様々な供試生物を用いて水環境中に存在が確認されている医薬品の毒性評価を行っており、生態毒性に関するデータが十分でない状況において、貴重な報告であると言える。今後、今回は報告されていないミジンコ、メダカなどに対する影響の研究に期待したい。9-2では、従来の水生生物を用いた毒性試験ではなく、安価で管理・操作が簡易なブラインシュリンブ耐久卵を用いた卵孵化阻害毒性試験の提案がなされ、ヒメダカ急性毒性試験との感度比較などの結果が報告された。多くのサンプルを簡易・迅速に試験することは重要であり、今後の成果が期待される。9-3では、藻類、ミジンコ、魚類の毒性試験結果を総合的に評価し、河川水の安全性評価を試みている。複数種類の毒性試験結果をスコア化し、最も強い影響が観察された試験結果に着目することによって、サンプル間の相对比较を行っていることが注目される。9-4では、界面活性剤の水生生物毒性に対する界面活性剤の種類、硬度、塩分濃度などの影響について検討し、毒性が表面張力で整理できることを示した。10-1では、ヒメダカを用いた画像解析法による水質連続監視計器の開発の報告がなされた。異常検知方式を改良することで高感度化が可能であり、また、供試生物の個体数を従来の15~20匹から10~15匹に減少させることが可能との報告がなされた。今後、他の生物への応用が期待される。10-2では、高等植物を用いた生長評価エンドポイントの基礎検討を行った結果の報告がなされた。高等植物を用いた毒性評価は、甲殻類や藻類を用いた評価方法と比較して検討例が少なく、未知な部分も多い。本発表では、高等植物における塩害評価と毒性評価の分別を目的とし、試料水の電気伝導度を指標とした検討結果が報告され、その有効性が示された。

(鹿児島大学・工 高梨 啓和)